おちほ

第76号　平成25年6月20日　発行　　社会福祉法人　椎の木会　落穂寮　発行者　太田正則
TEL 0748－77－2299　FAX 0748－77－5588　http://ochiho.noor.jp/

氏神祭!!

今年も元気に、皆で氏神祭に参加しました。今年は、管理学習棟の工事もあり去年のような大きな神輿（みこし）は作れませんでしたが、利用者さんが大好きなくだものや、たこやき、今年引退されたストレッチマンなどが出来ました。それぞれ好きな神輿を持ち東寺グラウンドまで地域の方の声援を頂きながら「わっしょい！わっしょい！」声を出し、汗をかき頑張って歩かれました。途中、神輿にロープがからまったりする事もありましたが、協力し合い引っぱって無事楽しく過ごせました。天気もなんとかもち、他施設の神輿も鑑賞しながらジュースを飲み、帰りもケガなく帰って来られました。今年も一年、氏神様に感謝しながら元気に過ごしていきたいと思います。

岩場での納得

理事長　山下陽一

白浜の「崎の湯」

糸賀先生が近江学園の創設初期に苦悩されたことがさまざま語り継がれ、また『糸賀一雄著作集Ⅰ』（日本放送出版協会）にはご自身の気持ちを吐露された記述もあり、当時の苦悩の様子をうかがい知ることができます。私はそのなかでも「魂の故郷―白浜での体験」（前掲著作集一〇四ページ）は先生ご自身の内部においてパラダイム転換があったのではないかと思っています。一九五一年（昭和二六年）二月の事ですから先生の三七歳頃のことだと思われます。

糸賀先生は、敗戦直後の社会的混乱のなかで近江学園を創設し、さまざまの軋轢の中で学園運営の安定をはかろうとされました。学園は必要に迫られて急な拡大と同時に世間の注目に対して妬みや中傷の憂き目に会います。児童福祉という未開拓の分野への突進の姿勢に、目指す理想と隔たる現実の落差に翻弄され、肉体的・精神的疲労が極限に達しておられました。そのときの様子が記されています。

「…いたたまれなく、妻にも学園にも何処へ行くとも告げず、鞄一つさげて」見当もなく白浜の温泉町に旅をされました。岬の突端にある漁師旅館に泊まりそこの外波の打ち寄せる岩風呂に身を沈めます。そのとき、糸賀先生は湯に浸りつつ、寄せては返す波の音とともに身を浸していました。その時突然「電気にうたれたよう」な衝撃を受けました。今までの心のわだかまりが突然雲散霧消し複雑に絡まっていた糸が跡形もなく消えてしまった様子です。そこには「全身がさわやかにみちて、一切がなんでもない。別に何がどうだからどうということではない」（前掲著作集一〇七ページ）と表現されていますが、長い間ご自身の苦しみと思っていたことから目前の扉が急に開いたのをお感じになったのでしょう。先生ご自身「湯崎の『崎の湯』の一瞬に暗雲の吹きさるる思いをする。」と日記に書いておられます。岩湯に身を沈め無限に繰り返す波の音に身を委ねるうちに、突然心の殻が破られ何かのこだわりから脱皮された瞬間だろう思います。

以前この欄に『理系の壁』（二〇〇四年）として触れたことがあるのですが、脳科学者の養老孟司さんご自身が「はっきりしないこと」として述べています。養老さんの御尊父は彼が四歳の時に結核でお亡くなりなったのですが、「…三十代のころだったと思います。（略）ふと、地下鉄に乗っているとき（略）初めて「父が死んだ」と実感したのです。」とあります。三十歳代に周囲の状況と無関係に突然起きる新しい世界への「開け」です。この心の内面的な組み換えの体験は誰にも起きるわけではない特異な体験のようです。

波のくりかえす音は人生に「開き」をもたらすらしく、哲学者の西田幾多郎も無限に繰り返す波の音の無限性の中の「人生」を感じているという体験を述べています。

椎の木に秋風

近江学園の発足以来幾多の苦難や人事の細事の泥沼にあった先生は、二五年・二六年の作句が激減しています。同著作集に「どんぐり句會」として整理されていますが、昭和二十一年一月から昭和二十四年十二月まで連続してあげられているのですが、その次は昭和二十七年に飛んでいるのです。「南郷」九号（昭和二十四年十二月）には

秋潮に沈めるあまの足白し

という句があります。おそらく白浜での舟遊びでしょう、秋に入った潮のひんやりとしたなかでの海女への先生の心の移入を感じることができます。

昭和二十五年・二十六年の近江学園は、先生にとって心身ともに極限状態まで追いつめられた期間だったろうと予想されるのですが、二十五年は、学園の児童の入所定員増と共に椎の木会による落穂寮の発足があげられます。椎の木会の理事さんとの間には昔から気持ちの不調和があったのかもしれません。二十三年末の「南郷」には

見なれたる大椎の木や秋の風

とあり、先生の後援団体に対して余程の気使いがあったことを予想するのです。また、大きな台風被害の復旧があり、信楽学園構想について法的に未整備のため国と掛け合ったりと骨身を削る交渉も次々と起こりました。

一方、学園内の資金繰りに東奔西走、若い職員の恋愛や結婚などのプライベートな問題を先生のご自宅で聞かなければなりません。相談者は自分のことだけなのでしょうが、先生のお立場は同時に立場の違う複数の人が押しかけてやってくる。その苦悩は御自身が作り出したと自責されたのでしょうか、そんな中での「白浜での体験」でした。先生が三十七歳のときでした。

パラダイム転換

糸賀先生はどうしようもない大きな問題をご自身だけでかかえておられました。そして、せっぱつまったその極みにおいて急に雷に打たれた衝撃とともに「扉」が大きく開かれた、という体験だったのではないかと思います。おそらく、先生ご自身のなかに逃げ場のない行き詰まりの極限にあったけれども、突然時期を得てあおいさなぎが大きなアゲハに変態するごとく心の組み換えがなされたのがその時だったと思うのです。その後に出たものははらわたからこみあげてくる「欣喜雀躍」でした。そして学園の田村先生に宛てた長い手紙をお書きになりました。

おそらく、私たちでは到底体験できない心の「開け」があったのではないでしょうか。先生の三十代後半の繊細な意思と柔軟な感性によりパラダイム転換をおこなうことができたのではないかと思っています。

（二〇一三・五・二八）

「支えるを」分かち合う

施設長　太田正則

政権交代後、アベノミクス効果により円安・株高の経済状態にあります。長引くデフレからの脱却を目指した政策により、狙い通り徐々に物価が上昇し始めました。円の動きは支出として直接物価に影響を及ぼし、生活に必要な最低限の物の価格が上昇しており、今後の利用者さんの生活への影響が心配なところです。

さて、安倍政権が描き求める日本経済は、ちょうど私が入職した頃のバブル時代だと思いますが、落穂寮の創立は更に倍の年月を遡った六十三年前になります。戦後まもない頃、今年度生誕一〇〇年を迎えられる糸賀先生が中心になって創られた近江学園から枝分かれした最初の施設です。その役割は重度・最重度と言われる知的ハンディを持つ児童の療育にありました。滋賀県内外から集まった児童に対しての適切な教育と生活指導により、多くの児童を地域へ送り出してきました。一方、重い知的ハンディにより更なる療育が必要な児童は、十八歳を過ぎても卒寮に至らず、現在まで在寮されています。

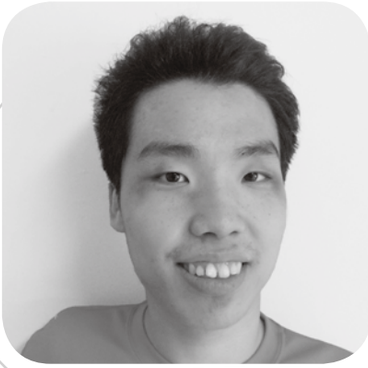
創立当時の落穂寮の役割は利用者の変化とともに変わり、「県内の重い知的ハンディを持つ児童の中から、入所させて生活習慣の確立と教育の確保が必要と判断された児童」の療育を目的とする特定の利用者を対象としたもの（措置制度）から、「入所利用者だけでなく、地域で暮らす障がいを持つ方が必要とする生活支援」の提供を目的とした役割（契約制度）となっています。養護学校が義務制になりどんなに障がいが重くても学校に通うことができるようになり、在宅支援サービス事業所が地域に作られ、それまでは入所して二十四時間三百六十五日の支援を受ける事が必要だった方も、現在ではいろいろな生活支援サービスを受けて地域生活を継続することができるようになりました。創立当時の近江学園職員のモットーとして「近江学園三条件」というのがありますが、その中の一つに「四六時中勤務」というのがあります。当時は寝食を共にして児童の教育や生活習慣を指導して行く必要があるという職員の熱い思いから出てきたものですが、当寮では常時何らかの支援が必要な利用者さんの生活を維持するために職員が入れ替わりながら二十四時間（四六時中）の支援をしています。病気やケガで入院治療が必要な時も、病院側からの要請により同様の支援を提供することになります。そこには職員の義務感や使命感が存在します。しかし、地域においては、常日頃から関わりを持っている人に対してなら当事者として義務感や使命感から支援を提供する人たちも、第三者の立場に立つとそこまで気持ちが働くことは少ないでしょう。つまり、施設入所と同様二十四時間三百六十五日、当事者ではなくてもこのような体制で支援を提供してくれるサービスが、地域で暮らす重い障がいを持った方にも必要なのです。当事者であるその方の関係者だけで支えるのではなく、いざという時には多くの人が関わって支える事ができるサービスを整備する必要があると思います。どこにいても同じ支援が受けられるためには支援提供事業所があちこちにできなければ実現しません。そして支援に携わってくれる人も必要です。ひとりの人を支えることで多くの人が笑顔になれるのですが、そのためには一人ひとりが少しずつ「支える」を分かち合う必要があります。そして何よりも、義務や使命に頼るのではなく、そこに報酬が担保されることで事業の継続を確保し、みんなが安心して暮らせるようになればと思います。

経済が上向き傾向ではありますが、特定の企業や個人投資家だけが潤うのではなく、新たな雇用を生み出すことと多くの人が笑顔になるために、障がい福祉サービス施策の更なる充実に向けて財源を確保していただきたいと願っております。

（二〇一三・五・二八）

2013 新人紹介

NEW FACE



昴志くん（18才）

ECO班でがんばっていきます!!

（（善彦さん・足立ST・淳さん））

はじめまして。男子棟に配属されました足立（あだち）　一弘（かずひろ）と申します。今まで障がいを持った方と接するのは全くの初めてのことであり、正直期待よりも不安の方が大きいのが現実です。以前勤務していた職場の先輩が福祉の世界に飛び込まれ、その先輩が「人に対してやさしくなれるよ」と言っておられたのが印象に残っています。まだ、その言葉の意味を十分理解することはできていませんが、一日も早くその言葉を理解できる様、日々頑張っていきたいです。

落穂寮に就職してまだ日が浅いですが、今までは人の悪い所ばかり捜していましたが、人の良い所を見つけていきたいです。支援を通じて利用者さんのキラリと光る所を見付け、利用者さんが必要とされる支援ができればと思います。

まだまだ不慣れな面ばかりで、失敗ばかりですが、一日でも早く一人前の行動ができる様頑張ります。よろしくお願いします。

（（亮さん・重輔さん・岸本ST））

皆さん、はじめまして。この度、男子棟で勤務させて頂く事になりました岸本（きしもと）　淳（あつし）です。

僕は、前職の特別養護老人ホームで、高齢者の方々の介護をさせていただいておりました。

その際には、介護士が業務を行うだけで多大な時間が必要で、利用者様一人一人と、ゆっくり関わる時間を持つことが難しい状態でした。

一例ですが、僕が特別養護老人ホームで勤務していた一年間で、利用者様とのんびりと外へ散歩に出かけるという事がほとんどできませんでした。

そのような事から、介護士のあり方について考えるに至り、もっともっと利用者様と関わりをもつ事が出来る職場を新たに探していた時に、落穂寮の求人を知り、願い叶って、この落穂寮で、毎日利用者様と関わる時間を持つことができ、笑顔で過ごす事が出来ており、とても幸せです。

これからも、利用者様の安全安心の為に、それから笑顔で共に過ごせるように、支援技術や知識を身に付けていけますように、ご指導よろしくお願いします。

（（孝司さん・山口ST・尚志さん））

初めまして。本年度より男子棟で働かせて頂く事になりました山口（やまぐち）　賢太郎（けんたろう）と申します。

私は、びわこ学院大学教育福祉学部子ども学科を卒業し、保育士と幼稚園教諭一種免許を取得しました。在学中には、保育所や幼稚園、知的障がい者支援施設、療育センターなどへ実習に行かさせてもらいました。実習では、コミュニケーションの大切さや子ども達や利用者さんとの信頼関係を築いていくことの大切さ、職員同士の連携や地域・保護者との協力の必要性など多くのことを学ばせてもらいました。

落穂寮へは、大学の先生の薦めもあり、実際に見学や体験をさせて頂いた際に、職員さんがとても楽しそうに利用者さんと関わっておられる姿を拝見し、「僕も職員さんの様なあたたかい支援がしたい」と思い志願させて頂き、今に至ります。

落穂寮の生活支援員として働かせて頂いて約二か月が経ちました。少しずつ生活リズムにも慣れ、利用者さん達と関わる中で日々発見が多く、とても楽しいです。これからも、利用者さんと関わる中で信頼関係を築いていき、自分も楽しく利用者さんも楽しくいられるような支援を目指し頑張っていきたいと思います。

はじめまして。この4月より女子棟で働かせて頂く事になりました初田（はつだ）　和穂（かずほ）です。

私は、高校時代より障がいを持つ子どもたちと関わるボランティアを現在も時間を見つけ行っています。もともと私は幼少時代より障がいを持たれている方と接する機会がありましたが、高校時代まではあまり興味がありませんでした。

しかし、高校時代に自分自身を変えたいという興味本位で参加したところ、障がいの方と接する楽しさ、喜びを知りました。そして大学時代も積極的に講習会や他のボランティア活動にも参加してきました。

こちらで働き始めて早二ヶ月。今まで経験してきた多くは子どもたちだったので最初は戸惑いと不安ばかりでしたが、少しずつ関わって行くにつれてコミュニケーションも取れるようになり利用者さんの笑顔に常に癒されています。これからも常に利用者さん目線に立ち、より良い支援員になれるよう頑張って行きたいと思いますのでご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

（（初田STと綾子さん））

こんにちは。今年の5月から落穂寮で働かせて頂いている泉（いずみ）　春美（はるみ）です。以前から福祉の仕事をしてみたいと思っていました。マイペースでのんびり屋の私ですが努力して先輩の皆さんに少しでも近づけるよう一生懸命頑張ります。趣味は読書と食べ歩きです。近くの小学校に読み聞かせのボランティアに行っていました。読み方はいまいちですが、いい内容の本を読むとみんなが喜んでくれるので、とても嬉しかったです。落穂寮でも読み聞かせをしたと思っています。どうぞよろしくお願いします。

（（紀代さんと泉ST））

4月から新たに、利用者さん1名と職員5名を迎えて『**明日の笑顔につながる支援**』を目指して頑張って行きたいと思います。

今まで同様、温かいご支援の程、よろしくお願いします。

男子棟 お花見遠足

今年も毎年恒例の遠足へ行ってきました。雨山の松籟（しょうらい）公園まで、それぞれグループに分かれて歩いて目的地を目指しました。もう四月というのに、当日は少し肌寒く、風も強い日でしたが、太陽はしっかりと顔を出しており、歩きやすい気候でした。

利用者さんたちもいつもと違う雰囲気なのか笑顔も多く見られました。全てのグループが無事到着できましたが、思いのほか風が強く、寒かったためすぐにお弁当を広げ、あまりゆっくりする間もなく、帰寮へ。

昨年は雨のため外に行けませんでしたが今年は天候にあまり恵まれませんでしたが、大きな事故もなく無事に終えることができました。

みんなでお弁当♪♪

みんなと外で食事をする数少ない行事でもあるので、来年こそは良い天気のなか行けたらいいですね。

石部の松籟公園へ!!
頑張って歩くぞ!

バスに乗って希望が丘へ!!

女子棟 お花見遠足

今年もやってきました!!四月といえば『お花見遠足』

今年は寮を飛び出し、希望が丘文化公園へ行ってきました。残念ながら桜を見ることは出来ませんでしたが、皆さん良いお天気に負けないくらいの笑顔を見せておられました。広いひろい芝生の上で最大限にのびのび過ごされる方、職員と元気いっぱいに走りまわられる方、勢い余って川に足をはめてしまわれる方…それぞれ思い思いの時間を満喫されていました。おいしいお弁当もあっという間にペロッと完食し、身も心もリフレッシュ!!同時に、これからの楽しみへ向けてたっぷりとエネルギーチャージをし、今年のお花見遠足は幕を閉じています。

また来年。楽しみですね★

お　ち　ほ

落穂寮開寮記念日

五月一日、今日は落穂寮の六十三回目の開寮記念日でした。

今年は、現場から三名、炊事から二名の職員が勤続年数五年で表彰を受けています。また、介護福祉士の資格を取得した職員もおり、合わせてお祝いをしています。近年稀にみる人数の多さですが、利用者の方に安心、安定して生活をして頂ける為にも、勤続年数の長い職員、資格を持つ職員が増えていけばと思います。

そして、毎年恒例の豪華な昼食。今年は豚カツ御膳を頂きました。お皿からはみ出る程の大きな豚カツでしたが、皆さん美味しそうにペロッと完食されています。

この先も何十年と歴史を重ね、その都度このようにお祝いの席を設けていければと思います。

こんにちは、落穂寮地域生活支援室です

地域支援室は平成22年5月開設以来4年目を迎えました。3名のスタッフで始めた事業は現在、5名の常勤スタッフと3名の登録スタッフとなりました。最初は契約していただける方も少ない状況でしたが、現在は利用申し込みも多数あり、すべてをお受けできない状況で大変申し訳ない思いでおります。地域生活支援室はどんな所で、何をされていますかと、よく尋ねられます。地域支援生活室は寮内の敷地に支援棟と呼ばれる建物があり、その建物を事務所として活動の拠点とし、敷地内の体育館、プール、運動場などを利用して支援活動にあたっています。活動空間の広さと利用できる設備の多さに、見学に来られる方々が驚かれます。その点が地域生活支援室の一番の特徴と思っております。

特に、プールや体育館に設置されている大型トランポリンは人気の的で、それを目当てに利用される方も多数おられ、特に夏は大盛況です。日々の支援内容としては、利用者の方の年齢や個性、特性に合わせて支援内容を考え、興味を持ち、楽しんでいただける内容を提供し、時にはご本人に合った教材を手作りしています。子供には遊びや療育、特に造形活動を大切にし、大人にはゆっくりと過ごして頂ける空間を提供しています。

また、ご家族のご負担を少しでも少なくするための配慮も欠かせません。ご家族の方とお話をする中で、ご負担を少なくする方策を検討し、それに沿っての支援も考えています。現在、利用されておられる方は甲賀圏域一円から六歳(小学一年生)～四十歳代の方まで幅広い地域と年齢層の方で、私たちスタッフはその都度、支援の方法と気持ちを切り替えています。

地域生活支援室はスタートして間もない小さな事業体ですが、今後利用を希望される方々のニーズに合った取り組みの中で、スタッフの力量を高めて行きたいと思っております。常に利用者の方、ご家族とスタッフが顔の見える関係でありたいと願っています。今後、地域生活支援室がどんなに大きな事業体になっても支援室に行けばあのスタッフがいると安心して利用していただける関係でありたいと願っています。

ロビーチェアー

テント

ご協力ありがとうございます。

社会福祉法人椎の木会及び落穂寮の運営にご協力いただいた方に、この場を借りて御礼申しあげます。

今後も変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

－物品の寄贈－財団法人　河本文教福祉振興会

湖南市ボランティア連絡協議会（敬称略）

ありがとうございました。大切に使わせていただきます。

泉

新年度がはじまりました。現在、落穂寮では、新しい事務所兼体育館の工事が行われています。

工事車両や重機の動く様を窓から興味津々に、利用者さんが眺めている毎日です。ご来訪の際にはご迷惑をおかけしておりますが、工事終了までもう暫くお待ち下さい。

新棟の完成後には、また紙面で紹介させていただく予定です。さて、新年度が始まって、今年から落穂寮を利用される方、職員として働く方が加わり、3ヶ月が過ぎようとしています。日々の生活に大きな変化は感じないようにも思いますが、10年前と現在を比べてみると大きく変わったと感じるところが幾つかあります。中でも、一番大きく感じるのは健康に対する意識です。以前は「元気で健康なのは当たり前」と思っていた（みんな若かった！）節があります。しかし、当時二十代の方は三十代に、三十代の方は四十代になっています。利用者さんの平均年齢は上がり、当然、体力は衰えています。現在はこれまで以上に、成人病の予防を見据えた体重と食事量の管理が行われ、また健康状態を調べるために血圧などの定期的な測定なども行っています。この先、十年後を考えながら、少しでも長く健康な生活が送れるよう、考えていく時期に落穂寮も来ています。

木言（こと）

春から夏へ
太陽は山を照らし
薄い緑から濃い緑へ
光りは濃い緑を育て
濃い緑は光りからエネルギーを生む
あなたは何を照らしていますか？
何から照らされていますか？
太陽のように